

## 情報知識学会関西西部会2009年度第2回（通算第11回） 研究会報告

論 題：美術品・文化財の保存修復とデジタル・アーカイビング、複製作成

発表者：品川晃二氏（大入）

日 時：2009年09月26日（土） 15：25～18：00

会 場：(株) 大入

共 催：アート・ドキュメンテーション学会関西地区部会

後 援：全日本博物館学会、日本ミュージアム・マネージメント学会、記録管理学会、情報処理学会人文科学とコンピュータ研究会

参 加：11名

概 要：

大入は、美術品・文化財・古書などの保存修復、装幀、複製等を行う会社である。そのような会社だけに、我々が通された会議室からして、照明に2種類の色の蛍光灯を使用していた（そのうち一つは紫外線カットのもの）。これは、複製を作成したときに、窓からの自然光のほか、複数の蛍光灯で、原品と複製の色調を見比べるためである。なお、発表者の品川氏によると、一見同じように見えても、光を当てる角度が変われば異なるように見えることがあるので、光を変えるのみならず、光を当てる角度を様々に変えて、原品と複製を見比べるということであった。

まず、会議室で様々な事柄についての説明と意見交換がなされた。以下しばらく、会議室での話について記すが、この部分は、特に断らなければ、品川氏の話の内容である。

スキャナーで画像をスキャンし、インクジェット・プリンターで、楮紙（和紙の一種）にプリントして複製を作成するのだが、プリンターのインクは、絵画の絵具と違い紙にしみ込まないので、同じ風合いを出すのが難しい。特に、自然退色したところの風合いを出すのは至難の業である。

インクは色落ちの問題を抱えている。耐久性インクの場合、室内展示ならば、数年間はなんとか色落ちしないが、直射日光の下で耐久力を発揮するインクはないように思われる。メーカー保証のインクの耐久年数は、どのような条件での年数なのかよくわからない。今後は、メーカーが行う耐久力テストの条件や結果をわかりやすく示してほしい。

複製の際に、写真機で撮るのはなく、スキャナーで

スキャンしているのには理由がある。写真ではプロの写真家には勝てないし、スキャナーの場合、写真とは異なりレンズを使用しないので、周囲にゆがみが出ないからである。

スキャナーはニューリー製である。この会社のスキャナーは、スキャニング対象からの光の反射に強く、刀の刃紋までスキャンできる。陰影も出るので、高精細でスキャンすると、浮世絵の摺りしわまで見えてくる。同じく高精細でスキャンし、いくつかの処置を施せば、寺院所蔵品で、線香などの煤で黒くなってよくわからない絵画も、はっきり見えてくる。また、乳白色化してよく見えないガラス乾板写真でも、工夫をすれば、見えるようにスキャンすることができる。

報告者は、上段の話聞き、ニューリーのスキャナーと大入のこれの使いこなし技術やノウハウは、複製のみならず、研究にも大変役立つのではないか思った。上記のほかにも、修復過程でフラットニング処理したときには、ゆがみのない状態でスキャンできるし、折り込まれたキレで元色が残っているものなどもスキャンできるが、このようなスキャニング・データも、学芸員や研究者の研究データとして重要になるはずである。今後は、スキャニング・データの複製利用のほか、研究利用を考えてはどうだろうか。様々な可能性が広がっているように思える。研究者と大入のコラボレーションに期待したい。

なお、デジタル・データを納品したら、大入ではこれを消去するという。万一流出したら大ごとになるからである。納品の際には、念のために、バックアップ・データをも提供するということであった。

品川氏の話が終わった後、東洋の作品（和書、卷子、屏風、掛け軸など）を扱う工房、洋書を扱う工房、スキャナーを置いている部屋を見学した。

東洋の作品を扱う工房は畳敷きであった。畳敷きだと湿度調整が容易であり、落としても汚れず、畳の上でも仕事ができるメリットがあるという。見学の時には、和書と屏風の修復が行われていた。屏風の背紙の一部が剥落していたが、スキャナーでこの紙をスキャンし、同じ文様の紙を作成して補うということであった。和書の方では、デジタル・カメラでページ撮影していた。これは、修復後、ページのつながりをチェックするためのデータとして使用されるということである。修復作業もさることながら、このような修復に入る前の事前作業に、多くの時間がかかるということであった。

一方、洋書などの修復工房は板敷きであった。洋書

の工房では、修復のみならず、特注製本依頼にも対応しているという。

ニューリーのスキャナーは2台あった。400dpiの比較的小さなスキャナーと、300dpiから600dpiまで精細度を調整できる大型のものである。

ニューリーのスキャナーについては、品川氏の説明により、その特性を理解できたのだが、プリンターの性能が良くなければ、うまく複製ができないのではないかと思い、この点について質問した。

品川氏によると、きれいに色が出るように設計されたプリンターは、複製には向かないということである。このようなものは自動的に色補正し、かえっておかしくなるという。素直に色が出るプリンターがよいらしい。なお、鉄、ガラス、金箔の上でもプリントできるプリンターが、ミマキエンジニアリングから出ているということであった。これは、紫外線硬化インクを使用するものである（後で、このプリンターで金箔の上に刷った見本（屏風の複製）を見せてもらった）。

最後に、会議室に戻り、意見交換した。技術者の確保について質問が出たが、仕事内容を記して募集をかけているとのことであった。応募者の多くは、その時点では素人である。面白いことに、技術者は素人で雇う方がよく、大学で修復技術を専攻したものは定着しないという。大学で学んだことと、採算ベースの仕事との間のギャップを埋められないようである。大学で修復技術を専攻した者にとっては、重要文化財や国宝などを修理する工房の方が、向いているのであろう。

最後に、品川氏から、デジタル技術を使用した複製の仕事はここ5年くらいのことであり、大入の仕事は、時代によって変わってきているという説明があった。たとえ伝統技術が基本の会社であっても、時代のニーズにしたがって変わっていかないと会社は存続してゆけないということである。